

上昇線を描がいた県勢

ビッグ・テンからみた1960年

ことしも余すところあと一月、人それぞれにいろいろな感慨があるように、県政にも明暗とりどりのこの一年だつた。

県政の年輪—それが、また一つふえたのである。ところでそれは、樹木に見られる成長を示すように、県勢の進展を示す年輪だつたといえるだろうか—

そうした一年間の反省と、新たな年への期待のため、ことしもまた『県政ビッグ・テン』が選ばれた。

このビッグ・テンは、ことし一年間に起きた主な県政二十項目の中から、部長会議において決定したもの

で、全国的に共通のものは除いてある、

決定されたビッグ・テンをみると一位にランクされたチリ地震津波を除いてはいずれも明るい面で占められており、この一年が、堅実な県勢進展の年だつたことをあらわしている、

なお、こころみに第一回となつた一九五〇年からのビッグ・テンを掲げた（十二頁）が、これによつて、本県の歩んだ歴史が一見してわかりしかも、年ごとに上昇線を描がく県勢の跡が把握できて、県民にとつてよい県政資料となろう。

1960年県勢ビッグ・テン

- 1 チリ地震津波襲来す
- 2 六年連続大豊作
- 3 飛行場の設置きまる
- 4 南米岩手村発足す
- 5 県立中央病院できる
- 6 青年の家、ユース・ホステル、国民宿舎等続々できる
- 7 岩洞、豊沢両ダム完成し、四十田ダム着手さる
- 8 県営岩洞発電所完成と仙人発電所の着工
- 9 岩手丸、広田丸の建造
- 10 身体障害者更生指導所、精神薄弱者更生相談所および内職公共職業補導所の開設

1 チリ地震津波来襲す

五月二十四日早朝、本州太平洋沿岸を襲つた津波により、本県三陸沿岸各地は、一瞬にして交通、通信ともに杜絶し、言語に絶する惨状を呈した。

三陸沿岸の津波禍には三十年周期説があるといわれるが、こんどの津波は、かつて死者二千名を出した昭和八年三月の大津波を上まわるとも劣らない大災害を沿岸地方、とくに、宮古以南の地域にもたらした。県では被害激甚な大船渡市、

陸前高田市、釜石市、宮古市、大槌町および山田町に対し、災害救助法を適用する一方、同法に基く災害救助隊本部のほかに同月二十七日から七月十五日までの五十日間にあたり、災害対策本部を設け総合的な災害対策にあたつた。

応急救助としては、災害発生後ただちに総合指導班を四班編成して被災地に派遣し、現地との連絡指導に当らせるとともに知事より岩手駐屯地司令に対して自衛隊の災害地派遣を要請、さらに医療救護、防疫活動などの衛生対策をはじめ、食糧供給、塩害除去、資材あつせんなどの農林対策や水産、住宅、応急土木工事などの諸対策を講じた。

県下の被害は、人命において死者五十七名、行方不明五名、重軽傷者三百八名、罹災世帯六千九百七十四世帯、罹災者数三万五千九百二十一名を数え被害総額は百十五億円をこえたが、二度とこのような惨禍をくり返さないためにも、海岸保全事業などの恒久対策が、国の強力な支援によつて、速急に実現するよう関係市町村とともに運動が



写真は釜石の被害現場

2 六年連続大豊作

十月十五日現在の本県における昭和三十五年産米の予想収穫高は、三十三万八千二百二十（二百二十五万五千石）である。これは、有史以来といわれた昨年の産米実績三十一万三千二百三十三（二百八十八万石）にくらべて約二万五千石も多い文字どおり空前の大豊作といえる。南部の殿さまは二十四万石の大名だつたといわれるから百年たらずの間に十倍の生産量に飛躍したわけである。

ここ数年來の県内における産米の特徴をみると、二十九年以前と三十年以降では水稲の生産力の間に七万五千石という大きな開きが出てきたことで、これは土地改良事業の推進などによる作付面積の飛躍的増加と農業技術の進歩によつて災害を克服したためで、豊作は三年続かないというジンクスを破つて、豊作街道を六年間連続してばく進しているのである。

もちろん、それは、いつの日にも孜々としてたゆまぬ努力を続けた岩手農民の勤労のたまものにはかならない。

本県生産者のこの努力と生産への意欲を統計表で他県とくらべて見ると、まず作付面積の増加がとくに目立つし、全国平均とくらべても高いことがうかがわれ



写真は今年も大豊作に喜ぶ農民

3 飛行場の設置きまる

県では、国土総合開発法にもとづいて総合開発をはじめから八年目になり、北上川の洪水対策や土地改良、あるいは工業立地条件の整備などの各種の産業基盤の整備を進め、経済も次第に活発化してきた。県民所得も次第に全国平均に近づく方向に向っているが、こんごは交通施設の充実によつて各種産業の発展とくに鉱工業などの第二次産業を推進させる必要がある。最近各市町村とも工



写真は飛行場となる宮野目地区

場誘致に熱心になり、その成果もあがり数多くの工場新増設がみられている。この開発の効果をさらに大きくするためには、三十四年度からその候補地敷地区をあげて調査されてきたが、三十五年十月に花巻市宮野目地区が最も適格地であると決定され、空港整備計画がたてられたのである。そして国の予算の決定をみた上で、三十六年度から工事に着手することとなった。

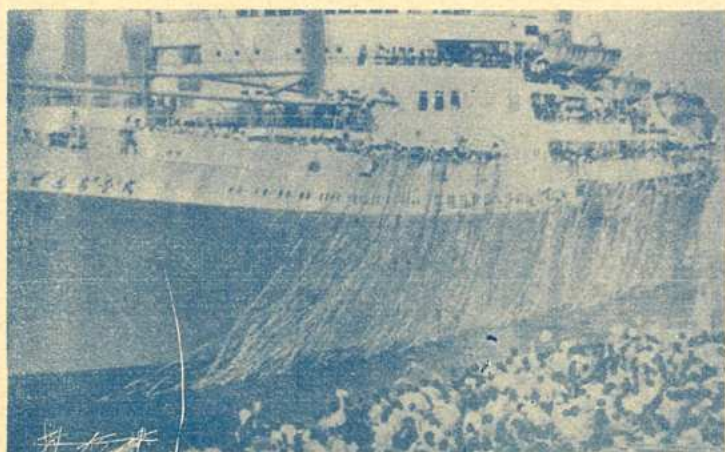
空港には国際航空路の空港で国が管理する第一種空港と、国内幹線航空路の空港で国が管理する第二種空港とそれに地方航空路すなわちローカル線の空港で県が管理する第三種空港の三種類があるが、こんど決まった宮野目の空港は第三種空港である。

敷地面積は約三十三万平方メートル、滑走路は長さ二千二百メートル、ダグラスD C 3型三十一人乗りの飛行機が着陸する予定であるが東京空港羽田までの所要時間は約一時間四十分位となる。

出来れば二カ年で完成させ、三十八年から利用したいものである。

4 南米岩手村発足す

県では、南米パラグアイ国アルトパラナ地区に岩手村を建設するため、今年度を初年度として、毎年五十戸、六カ年間に三百戸の県人を移住定着させることになった。すなわち、海外移住事業を重要施策の一つとして強力に推進することになったのである。



写真は横浜港から出港する渡航風景

今年度は第一年度として、関係機関の協力により、八月四日に十一世帯五十七人の県人が集団移住し、さらに現在今年度計画最後の移住希望者を募集中であるが、十一月末に募集をしめきり、合格者は明年三月に移住する予定である。

また、第一回渡航者を引率して十一月九日南米より帰県した県農政課長の現地報告が明らかにされるに及んで、移住希望者が大巾に増加する見込みが強くなり、南米岩手村の建設がいよいよ本格化することになった。

県としては、かねがね、国の募集要領の現地調査計画について、土地、気候の問題、道路建設の現況、営農計画の見通しなどを確認することを考えていたが、それが、今回の現地調査によつて確認されたわけで、こんごさらに積極的な措置を講じ当初目標の達成に努力することになっている。

(なお、現地の状況のくわしいことは、別項「八頁」に掲げている)

5 県立中央病院できる

県立中央病院は、県内医療施設の約四割をしめる県立病院の中核総合病院として、県民の医療サービスにあたつてきた。

ところが、いままでの施設がせまく、しかも老朽化していたため、近年めざましく発達した近代的医療を施すにはその機能を十分に果たすことができなくなつたため、全面的改築することに決定し昭和三十四年四月に工事費二億一千万円で着手したものである。

県民の利便を図るため診療を継続しながら施工する関係から、工事を第一期工事と第二期工事に区分し、第一期工事は本年一月末に完了し、第二期工事も十二月中には完工の予定である。

この工事は、鉄筋コンクリート造り地下一階、地上四階の延約一千三百三十九平方メートルで完成のあかつきには、地下一階はボイラー・アイソトープ・解剖・変電室・電・洗濯室など、地上一階は内科・外科・小児科・整形外科・放射線科・薬局など、二階は産婦人科・皮膚泌尿器科・耳鼻いんご科・眼科・歯科・ガンセンター・老人センター・手術棟など、三階

写真は完成間近い県立中央病院の全貌、総工費二億一千万円を投ずる



6 青年の家、ユース・ホステル、国民宿舎等続々できる

国民宿舎等続々できる

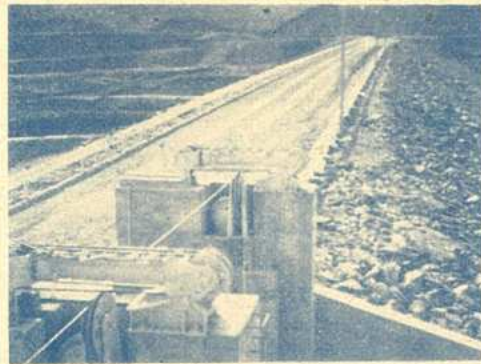
本県青少年教育振興の施設として、胆沢郡金ヶ崎町県立六原農場内に総工費一千万円で「青年の家」を昨年着工し、本年三月二十五日完成、同年五月十四日開所をみたのであるがこの利用は、計画研修と、利用研修の二本建とし、計画研修は、水田、畑作、果樹園芸、蔬菜、酪農、林産、生活改善、女子生産の八コース制にし年間十五回、一回六十名以内を限度として実験実習を中心とした学習を通じて近代的な農林畜産関係の知識技術の体得をはかり利用研修では、県内各種青年団体会員青年学級生、農村建設班のほか、青少年教育関係機関、団体の研修が実施されている。なお生産的学習集会などの利用にも使われている。

ユース・ホステルは、健全で楽しい旅行を誘致奨励するため安い料金で規律正しく、泊れて、お互いに奉仕と友愛の精神を基調とした交歓ができる施設として、国立公園八幡平への拠点丸森山麓、国鉄「もみやま山荘」の東方約千メートルの位置にできた。この施設は、総工事費一千四百六十万円を投じて鉄筋コンクリートおよびブロック平屋造りで、宿泊室六のか休養室、集会堂などが完備され収容人

写真は今年三月完成した青年の家



7 岩洞、豊沢両ダム完成し 四十四田ダム着手さる



岩洞ダムは岩手山麓約一万畝開拓のうちの開田分約三千畝に対する水源として農林省直轄事業によつて、建設されたダムである。岩手山麓一帯は従来は軍用地または、農林省種馬育成所用地として広大な面積を占めていたが、その周辺の開発については、戦後新たに着目され三十年度になつて本格的着手をみたのである。この間農業水利事業と発電事業との水の配分、あるいは工事費用の振り分けの問題などが論議され、この事業の推進には幾多の難関があつたのを突破して、昭和三十五年に完成の運びになつた。

ダムは総貯水量六千五百六十万立方メートルで、これから開田される約三千畝に灌漑されるが、このダムを利用した発電所も同時に完成した。ダムの事業費は約二十九億円で、開田地からは米約一万二千トンの増産がみ込まれている。

豊沢ダムは北上川の支流である豊沢川の上流に農林省によつて建設されたダムで、専ら農業水利に利用される。灌漑の区域は花巻市、石鳥谷町にまたがる五千三百六十畝の水田で、このうち従来から水の不足だつた旧田四千二百九十一畝への補水と、新たに開田されつつある一千二十五畝に灌漑する。

このダムは二十八年度に本格的に着工されて八年目の三十五年度に完成したが、この事業費は約十五億六千万円で、米約五千トンの増産がみ込まれている。

四十四田ダムは北上水系の洪水調節用のダムとして計画された五大ダムの一つであるが、そのうちの四つ目のダムとして三十五年度に約六千万円の予算で本格的実施調査に着手された。北上川上流の盛岡市北部の四十四田地点に位置し洪水調節用と県営発電に利用される。

写真は完成した岩洞ダムの偉容

8 県営岩洞発電所の完成と 仙人発電所の着手

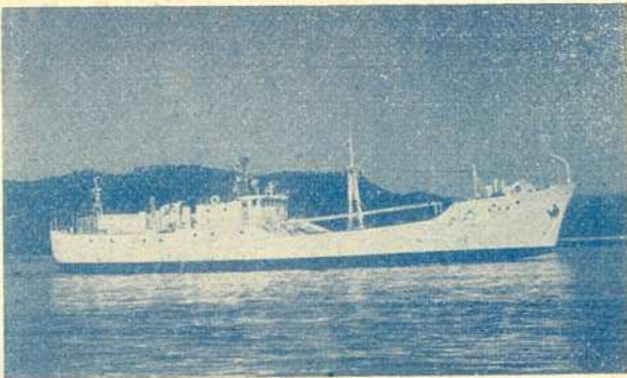


県営発電第一号の胆沢第二発電所に続き、昭和三十二年に着工した岩洞第一、第二発電所がこの十二月に竣工の運びとなつた。この建設工事は五十四億円の経費と足かけ四カ年の歳月を費した大工事である。このうち第一発電所は最大出力四万一千KW、第二発電所は八千三百KWでこの両発電所を合わせると最大出力四万九千三百KWとなり、その規模は胆沢第二発電所の最大出力六千二百KWの約八倍に近い大きなものである。年間発電量は二億一千KWHという莫大なもので、本県全需要量の約三分の一をまかなえる量に相当する。第一発電所は、地下三百メートルの地点にベルトコンベヤー型水車二基とこれに直結する発電機や地下配電盤を備えて発電しており、この地下発電所との連絡は、地上の発電事務所から傾斜二十二度、長さ六百メートルの斜坑に敷設されたインクラインでなされるものである。第二発電所は、第一発電所で発電に利用された放流水をさらに利用して発電するもので、岩手山麓の約三千畝に及ぶ開拓地や既耕地の灌漑用水として利用される五月から八月までの期間を除いて運転されるがこの操作はすべて第一発電所から遠方操作される無人発電所である。なお、この両発電所の発電に必要な水量は岩洞ダムによつて供給される。

また、ことし七月には湯田ダムの水を利用する仙人発電所に着手したが、これは出力三万七千六百KW、総工費約三十九億円、昭和三十八年度に竣工予定で、これが完成すると県営発電の最大出力約十萬KWとなり、県営発電を行なう全国三十余県のうち一、二番目となる。

写真は県営岩洞第一発電所の全貌

9 岩手丸、広田丸の建造



県水産試験場所属の岩手丸は、さいきんのめざましい漁業の発展にともなつてトン数、馬力、船質ともにつぎつぎと大型優秀船に切り替え、そのときどきの情勢に応じて使命を果たしてきた。

さる十月二十五日建造費一億五百万円で完成した第五代岩手丸（三百八十トン）は、南方漁場の遠隔化と水産高校実習生の増加に応じて大型新鋭船に切り替えら

れたものである。

遠距離航海に対する安全と操業能率の向上、乗船員の保健衛生のため、あらゆる近代設備を施した優秀船で、南方まぐろ漁業の指導、資源調査と優秀な漁業技術員の育成に一段と充実した成果をあげてを期している。

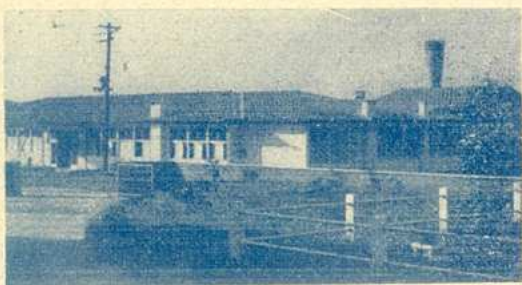
本船は、さる十月三十日釜石港を出港、処女航海の途につき目下アフリカ海域で操業中であり、来年一月初旬意義ある第一次航海を終了して帰国する予定である。

県立広田水産高等学校所属の実習船「海幸丸」が老朽し、廃船となつたため産業教育振興法による国庫補助二百五十万円と、地元寄附金五十万円を加えて総工費約九百万円をもつて実習船「広田丸」を建造した。

新造船広田丸は船体大船渡造船鉄工株式会社において、建造したもので、総トン数三三・七九ト、主機関はディゼルエンジン二百二十馬力、連力約九ノット、定員二十三名、無線および方向探知機、漁群探知機をも装備した優秀船で同船の竣工はひとり広田水産高等学校だけでなく、本県水産教育振興のため今後の活躍が大いに期待されている。

写真は第五代岩手丸の勇姿

10 身体障害者更生指導所、精神薄弱者更生 相談所および内職公共職業補導所の開設



県身体障害者更生指導所は、肢体不自由者の更生に必要な治療と訓練を行なう施設として本年四月に盛岡市上田緑ヶ丘に開設した。この施設では、日常生活に介護を要しない比較的程度の障害者の機能の回復と心の不安を解き地域社会への適応力をため、また、入所者の希望と職業適性検査の結果により、洋裁手芸科、時計科、孔版科、および靴工科の四科に所属し、技能の習熟と社会生活に必要な基礎的な一般教養を身につけるよう専門職員が指導に当たるとして、東北各県にさきがけ、ことしの三月に設置が決定し四月一日から職員七名でもつて業務を開始している。

業務の内容は、内職の紹介あつせんをはじめ、求人開拓情報の提供および内職技術の指導、苦情処理などのほか、内職労働の実態および内職問題に関する調査にもとづく工賃の適正化に関する指導などである。

開設以来次第に利用者が増加し十月末現在における相談件数は、千二百八十件は多いにのぼっている。

写真は身体障害者指導所と精神薄弱者相談所の全貌